

トライアルプロット

著：福嶋 亮平

王都ラグリンドに程近い港町、グレンポルト。街道から少し外れた草地で、ひとり黙々と剣の修行に励む最中、巨大な蜘蛛型の魔物の群れに襲われる商隊に気付いた青年フリオ。即座に救援に入るも、多勢に無勢。程なくして戦線が崩壊しかけたものの、ヴァルド族の偉丈夫による助太刀のおかげで間一髪、一行は事なきを得る。さっさとその場を立ち去ろうとする壮年の男を引き止めたフリオは、御礼に町で飯と酒を奢らせてほしいと申し出るのだった。

生来の気質が似通っていたのか、たちまち意気投合する二人。男が自らを『クルド』と名乗った所で、別行動中だったエルフ族の女性、セレスが合流。一目で『クルド』の正体を『剣聖ドゥアグ』だと看破するも、無言の威圧を受け沈黙。

困惑を呑み込んだセレスがもたらしたのは、名工ドルカンの名とその居場所。先の魔族との戦いを経たフリオは、強力な武器を探し求めていたのだった。「ドルカンは俺の義兄だから紹介してやろう」というドゥアグの申し出に、一も二もなく飛びつくフリオ。

結局、悪意の感じられないドゥアグの態度にセレスも絆され、三人は一路、ドルカンの住まうウルバロアへ。

ドゥアグの加入により順風満帆の道中で、一行は魔族の集団に追われる修道服姿の女性を助け出す。女性は深い感謝と共に、自らをリノイと名乗り、布教のためにウルバロアへと向かっている最中だと明かす。リノイを加え旅路は再開されるのだった。

数日後、無事にウルバロアへと到着した一行。ドゥアグの案内でドルカンの工房を訪れたものの、「ワシは“剣聖”様の気まぐれやお遊びに付き合う気はないぞ」と、すげなく一蹴される始末。『クルド』の正体を知り驚愕するフリオを後目に、ドルカンの娘シャニアの取り成しによって、「条件付き」で依頼が受諾される。

村から徒歩で数日の距離にある魔境ピルグリア鉱山で、ごく稀に産出される「アダマンタイト鉱石」の採掘に向かう三人。「助けてくれた恩に報いたい」という熱意に押し切られる形で、リノイも同道することに。翌日の早朝、シャニアに見送られながら旅立つ一行。

道中、険しさを極める道程にリノイの体力が追い付かず、行程に遅れが目立ち始めると、ドゥアグはリノイへの苛立ちを募らせていく。険悪な雰囲気の中、リノイの不注意によって強力な魔物の群れに襲われてしまったことで、リノイへの怒りを爆発させてしまうドゥアグ。

ますます二人の溝が深まるかと思われたが、リノイを庇った際に負った傷から侵入した毒に倒れ伏したドゥアグを、リノイが献身的に看病し、その苦痛を和らげるために夜通し歌を歌い続けたことをきっかけに、二人の関係は一変していく。

目的地へと到着した一行は、セレスの知識、フリオの動物的嗅覚、ドゥアグの怪力の合わせ技によって、難なく目的の鉱石の採集に成功。早々に現場を離れようとした矢先、折悪しく魔境の“ヌシ”である巨大なドラゴンに襲い掛かれるも、これを討伐。

数日後、村に帰り着いたその足で工房を訪ねると、すぐさま剣の制作を開始するドルカン。工房から

締め出されて哑然とする一行に、シャニアは村の英雄ドゥアグの帰還と“ヌシ”の討伐とを祝した盛大な宴会が、明日の夜に催されることを伝えるのだった。

宴会当日、興の乗ったドゥアグに推薦される形で、人前で歌を披露するリノイ。その歌声に耳を傾けながら、フリオは残してきた家族のことを、ドゥアグは、幼い頃から優秀だった義兄に対する劣等感のことを打ち明け、静かに二人は絆を深めていく。

ほとんどの人が寝静まった頃。「二人きりで話したい」というリノイの誘いに応じ、人気のない場所まで後をついていくドゥアグ。辿り着いた先にて、様子のおかしいドルカンにいきなり襲い掛かれてしまう。

一方その頃。不快な胸騒ぎで目覚めたフリオとセレス。直後、村全体が悲鳴と怒号に包まれる。宿の外では、武器を手にした村人たちが、必死に助けを求めながら互いに殺し合いを始めていた。

状況が飲み込めないまま、正気のまま身体を操られたドルカンとドゥアグが激しく切り結び続ける中、すべての元凶であるリノイは、自分が劫魔将『哀祈のリノイ』であり、歌声を聞いたものを操る能力を有し、エルデ征服の大きな障害となり得る『剣聖ドゥアグ』の命を、己が神エテルノアに奉じることが目的だと明かす。

心を許していた仲間に裏切られた動揺に心を乱すドゥアグ。自分と互角以上の冴えを見せるドルカンの剣技に圧倒され始めると、かつて克服したはずの劣等感に再び蝕まれ始めていく。狂ったようにドゥアグを憐れみ、慰め続けるリノイによって、ついにはその心をへし折られてしまうのだった。

再び一方、その頃。やむを得ず村人を片っ端から気絶させることで事態の收拾を図っていた二人。やがて、村のどこにもドゥアグたちの姿が見当たらないことに気が付き、搜索を開始する。

ドゥアグをさらに深い絶望と無力感に追い込むため、ドゥアグを操り、その手でシャニアを害させようと企むリノイ。ドルカンの慟哭とシャニアのすすり泣く声を、自作自演の悲劇に陶醉するリノイの狂った笑い声が掻き消す。絶望に顔を染めたドゥアグの凶刃が、とうとうシャニアに振り下ろされるも、間一髪で滑り込み、ドゥアグの手から剣を叩き落してみせたフリオ。

大切な仲間たちを傷つけられた怒りを爆発させると、黄昏の紋章を発現させ、動揺するリノイの隙を衝いたフリオが深手を負わせる。セレスとドルカンの追撃により完全に逆上したリノイが、本性を剥き出しにして一行に襲い掛かる中、ただ一人打ちひしがれたまま闘おうともしないドゥアグ。傍らで懸命に呼びかけるシャニアの声も届かない中、フリオがドゥアグに問いかける。

『目的も意志も伴わない「力」なんて脆いもんだよなあ！ ……俺の「力」は、魔族をぶっ倒して、皆を笑顔にするための力だ！ ドゥアグ！ お前の「力」は、いったい何のためのもんなんだ！？』

その言葉に、盲目的に「力」を追い求めるばかりで、その「意味」に目を向けようとしなかった自分の愚かさに気付くドゥアグ。ふと体勢を崩したフリオに襲い掛かろうとするリノイの姿を目にした瞬間、全力で駆け出す。

『フリオ！ 俺の「力」は、「守る力」だ！ 世界に笑顔をもたらすお前を、魔族のクソどもから守るための力だ！！』

己が力を求め、力を振るう理由を見出し、気炎を上げるドゥアグの一撃により追い詰められたリノイは「暴魔態」と化すも、敢えなく討ち取られるのだった。

ぐずぐずと身体を崩壊させる中、かつて純粹に人々の不幸を憐れみ、彼らの救済を心から祈る人間だった頃の“正気”を取り戻すリノイ。ある時から「神の声」が聞こえるようになり、そこからの記憶が混濁しているという告白に、見えざる「意志」の介入を密かにセレスは確信する。最後はドゥアグの介錯により、リノイは完全な消滅を迎える。

一週間後、ついにドルカンから約束の剣を受け取るフリオ。また、自由奔放に生きるドゥアグをずっと羨んでいたことを白状したドルカンは、自分の身代わりとして一振りの剣をドゥアグに託すのだった。

次の目的地へと向かって旅立とうとする二人を呼び止め、自分も最後まで旅を共にしたいと申し出るドゥアグ。

「——オレが必ず、お前を守ってやる」。

誓いを立てるドゥアグと固い握手を交わしたフリオは、盛大な見送りを背に村を後にするのだった。